

【代表研究者】

得田 真由

東京大学 総合文化研究科 博士課程

【研究題目】

伝統の再生：ダヤク族による口頭伝承の CD 化をめぐる人類学的研究

【研究の目的】

近代化が地球規模で浸透する現在、一時は消滅するかと思われた旧未開社会の「伝統」は、変化しながら復活し、確かな文化的役割を担っている。それに対して文化人類学も、国民国家や民族といった近代的共同体における伝統について関心を向け、議論を重ねてきた。この流れにおいて本研究の目的は、インドネシアのダヤク族による出版やカセットテープ、CD といった近代メディアを活用した口頭伝承の再活性化の試みを取り上げ、メディアが決定的な意味を持つ現代の文化風景（メディア・スケープ）のなかの、伝統の様態と意味を明らかにすることにある。メディア人類学として本研究は、テキストや技術としてのメディアよりも、当該社会の日常生活における人びとの経験としてのメディア実践を問題の中心に据える。ダヤクの置かれた歴史・社会的コンテクストを考慮しつつ、ダヤクがいかに彼ら自身の口頭伝承とメディアを関連付け、メディア化された口頭伝承を生きるのかを分析する本研究は、人類学の伝統研究とメディア研究の発展に寄与することを目指した。

【研究の内容・方法】

本研究はインドネシア共和国西カリマンタン州で実施され、州都ポンティアナ市内のダヤク学研究所 (Institute Dayakologi) を中心に、他に州政府教育局 (Dynas Pendidikan)、インドネシア共和国ラジオ・ポンティアナ支部 (RRI-Pontianak)、カトリック教会系文化団体コムソス (Komsos) およびランダ県 (Kabupaten Landak) のコミュニティラジオ局スニアナワンギ (Radio Komunitas Sunia' Nawangi) と公立スギナ小学校 (SD Negeri Seginah) を主な研究場所とした。資料収集の方法としては、文献調査・参与観察 (スチルカメラ・ビデオカメラでの記録含む) ・Semi-Structured Interview (IC レコーダーでの録音含む) を折衷した文化人類学的アプローチに拠った。

研究の焦点は、ダヤク族の文化的エンパワメントを目指してダヤク知識人が運営する NGO、ダヤク学研究所が 1993 年から行っている口頭伝承の記録・再生プロジェクトだが、対象射程には事業の歴史・社会的コンテクスト全体を据えた。ダヤクの中でも西カリマンタン最大のダヤク下位種族でありながら文化変容の激しさゆえに従来研究の手薄だったポンティアナ周辺に居住するカナヤン族 (Dayak Kanayatn) の社会に注目し、口頭伝承とメディアという視点から主に以下の 3 点について考察した。(1) 伝統的なカナヤン社会における、口頭伝承の構成要素・形態・パフォーマンス・機能・意味についての研究。特に語りの場として重要だったロングハウスと農地における口頭伝承の伝達過程を重点的に検討した。(2) 近現代における外部社会との接触過程でのダヤクの口頭

伝承の変容について、キリスト教・生活環境の変化・教育・経済システム・マスメディアといった要素との関わりから考察した。(3)口頭伝承の衰退に対する近代メディアを使ったダヤクの対応についての研究。近年最も成功した事例としてダヤク学研究所による口頭伝承プロジェクトを取り上げ、事業の目的・内容・政府や財団など他組織との協力関係・成果・問題点について考察した。口頭伝承の再生においては、学校教育と放送の2分野に着目し、ポンティアナ近辺の小学校とラジオ局にてカセットやCDに記録された口頭伝承がどのように使用されているかを検討した。また比較研究としてカトリック教会や州政府教育局による口頭伝承関連の試みも研究内容に含めた。

【結論・考察】

カナヤン・ダヤク社会において自己理解の根底を形作るとされる口頭伝承はロングハウスや農地での儀礼・作業・団欒の機会を通して、世代を超えて継承されてきた。だがキリスト教や政府が彼らの文化を非文明的だとして近代化を迫り、さらに教育を通じてダヤク自身が自文化を軽視するようになると、口頭伝承は衰退し、村落地域でもテレビや、最近ではビデオCDに媒介された外部情報がとって代わっていた。

ダヤク学研究所は文化的エンパワメントを目的に伝承の記録と再生を試みており、アクセスの便利なカナヤン族の、農作業に関する伝承が主対象となっている。特徴は近代メディアの活用に見られ、テープやビデオに記録した後、地域学習教材用の漫画本やラジオドラマの形に出力し、コミュニティでの伝承の再活性化を図っている。この地域では最も充実した内容だが、現在までにカナヤンの伝承の20%が記録されたに過ぎない。作業の能率化のためCD技術の導入が検討されたが、実際には頻発する停電や設備不足ため活用しきれず、一部がCD化されたに留まっている。特に停電には針金を用いた風揚げが関係するという指摘もあり、今後、この地域特有のメディア環境についてより広く検討する必要性が生じた。